

診療科を横断して最善の治療をご提案します

ココに
注目!

食道がん診療の新しいかたち ～食道がんユニットのご案内～

京大病院では、がんの治療に際して、各診療科の垣根を超えた横断的連携を進めています。それぞれのがんを専門とする経験豊富なスペシャリストが集まり、患者さんにとって最善の医療を提供する「各臓器別がんユニット」は本院ならではの体制です。今回は、外来においてユニット制を実践する「食道がんユニット」をご紹介します。



食道がん治療の各領域のエキスパートがそろっています



消化管外科 講師 食道がんユニット長
つのだ しげのり
角田 茂

2人に1人が、がんを患う時代といわれます。それに伴って、がん治療の技術も目覚ましい進歩を遂げ、現在では内視鏡治療、手術、放射線治療、化学療法や緩和療法を組み合わせる「集学的がん治療」が主流になりつつあります。そのためには、複数の診療科による有機的な連携が欠かせません。

特に、食道がんは治療の選択肢が多く、異なる診療部門の連携が重要になります。例えば、手術で病巣が完全に切除できる場合も、それによって食道や胃が失われることを患者さんが望まれない場合には、「では放射線治療と抗がん剤を進めましょう」というように、治療を開始する段階で病状に即した治療法の中から、患者さんの希望に合わせた選択が可能となることが多いのが食道がん治療の特徴です。それだけに、特定の診療科のみで方針を決定してしまうと、治療の幅が狭められてしまいます。京大病院では、領域の異なる食道がんの専門医が一堂に会して、全員で検討を重ね、患者さんの希望を伺いながら、一人ひとりの患者さんにとって最善の治療をご提案します。

手術を行う場合には、ほぼ全ての患者さんに胸腔鏡を使用した体にやさしく、かつ正確で精緻な手術を提供しています。2018年より最新型のda Vinci Xiを用いたロボット手術も通常の保険診療として行っています。また、私自身はロボット手術を他院でも指導する立場でもあり、京大病院は、日本でも有数のda

Vinciによる食道がん手術の実績を誇ります。さらに、他の病院では難しいといわれる化学放射線療法後のサルベージ手術や、喉頭まで一緒に切除するような大きな手術も耳鼻咽喉科・頭頸部外科や形成外科の医師と合同で行い、食道がんの根治に向けた手術を実践しています。

手術を受けられる患者さんに対しては、理学療法士(リハビリテーション)、言語聴覚士(嚥下訓練)、栄養士(栄養食事指導)なども含めた京大病院全体でのチーム医療を行っています。

臓器温存と根治を目指す化学放射線療法に積極的に取り組んでいます



放射線治療科 講師
さかな かつゆき
坂中 克行

食道がんは希少がんであり、専門家も少ないことが、本邦の現状ですが、本院の食道がんユニットには食道がん診療に必須となる各分野のスペシャリストがそろっています。各領域の専門医が3つの診察室を並べて、毎週水曜日に食道がんの専門外来を開設している点は他院にはない特色です。

食道がん診療における本院の特徴の一つは、外科手術だけでなく、食道、胃、喉頭、咽頭などの臓器温存と根治を両立させる化学放射線療法を積極的に行っていることです。食道がんに対する化学放射線療法に関して、本邦トップクラスの実施件数を誇る本院には、食道がんの化学放射線療法に精通し、化学放射線療法に伴う副作用のケアに習熟した放射線治療科医師、看護師が在籍しています。化学放射線療法完遂後、万が一再発した場合も、内科医・外科医と連携して可能な限り内視鏡治療、手術による根治治療を提案、実施しています。他院で治療困難とされた病状でも、本院ならば治療を提案できることがあります。化学放射線療法含め、食道がんに対する治療を希望される患者さんには、ぜひ本院を受診していただけたらと思います。

京大病院放射線治療科は、これまで様々ながん種に対する高精度放射線治療を導入してきました。頸部及び胸部食道がんに対する強度変調放射線治療に関しては、本邦で数少ない実施施設の一つです。通常の放射線治療技術では

必要十分な放射線量を病巣に照射できない場合でも、強度変調放射線治療なら適切に線量を投与でき、副作用を和らげることも期待できます。また、放射線治療は完遂までに1～1.5ヶ月程度の通院が必要となる場合が多いのですが、遠方の方でも無理なく治療をしていただけるように、入院設備も完備していますので安心してご相談ください。「食道がんなら京大病院へ」と思っていただければと存じます。

Specialist Interview

治療法について、すべてをフェアにお話しします

食道がんユニット外来を受診していただければ、基本的にはその日のうちに必要な検査を終え、治療についてのお話をさせていただきます。場合によっては、翌日からの治療も可能です。患者さんは、あちこちの診療科をまわる手間や、それぞれで待たされる面倒もなく、ご負担はかなり減ると思います。

また、患者さんに治療のご提案をする際には、それぞれの治療法におけるメリット、デメリットをフェアにご説明しています。患者さんにとって、多領域の専門医の話が一度に聞くことができ、また、判断のための情報をきちんと吸収できるのは、納得の治療を選択するうえでも安心ではないでしょうか。

腫瘍内科では、抗がん剤を用いた治療を行います。手術や放射線治療と組み合わせることも多いですが、治すことが困難な再発や転移したがんの場合には、抗がん剤による治療がメインとなります。このような治すことが困難となった病状の患者さんに対しても、治療経過中のどこかに治るチャンスはあるはずだという強い信念を持って、患者さんにしっかり伴走する姿勢で臨んでいます。また、京大病院の使命として、治験や臨床試験も多く実施しています。現在あるエビデンスやガイドラインをよりよくすべく、研究も進めており、それによって5年先10年先の患者さんに役立つ新しい治療方法の開発にも取り組んでいます。



腫瘍内科 特定助教
のむら もとお
野村 基雄

がん治療は最初が肝心だからユニットが機能します



腫瘍内科 特定助教
たまおき しょうし
玉置 将司

早期の食道がんには、侵襲が少なく臓器温存可能な内視鏡的粘膜下層剥離術を標準治療として行っています。内視鏡治療だけでは効果が不十分になる場合は、追加治療として化学放射線療法や手術をお勧めすることがありますが、ユニット内で放射線治療科や外科の医師との連携が密接に取れているので、患者さんにとって必要な治療に、より早くアクセスしていただけるのが利点です。

また、内視鏡治療においては最新の光線力学的療法も実施しています。これは、光感受性物質の投与後に病巣部に半導体レーザーを照射して腫瘍を壊死させる方法で、主に化学放射線療法後に食道にがんが遺残・再発した場合に用いて根治を目指しますが、治療のタイミングが非常に重要となります。こちらもユニット内で綿密なコミュニケーションが取れているため、ベストなタイミングで治療を受けていただくことが可能です。

がん治療というと「治す・治る」というゴールにだけ目が向きがちです。もちろん、それが一番重要なミッションですが、実は「どのように治療を始めるか」というスタート地点も大事です。最初に受診した診療科で特定の治療の説明しかされないのでは最善の治療環境とは言えません。我々のユニットでは、特定の診療科にかたよることなく、患者さん本位の治療をご提案しています。それによって、QOLも考慮した質の高い治療が実現できていると思っています。

INFORMATION 毎週水曜日は食道がんユニット外来を開設

毎週水曜日には、専門医が集って食道がんユニット外来を開設しています。
一人ひとりの患者さんに最善の治療をご提案・実践しますので、ぜひ受診ください。